© Felix Broede - Sony Classical

Featured Artist

イゴール・レヴィット

紀尾井ホールでは、2021年に「名ピアニスト3世代を聴く」ともいうべきプロジェクトを組んだ。その顔触れは、1945年生まれで77歳となった巨匠レーゼル、いよいよ円熟期を迎えたアンデルシェフスキ（53歳）、そして次代のトップの代表として35歳のイゴール・レヴィットの3名だった。レーゼルはフェアウェル、アンデルシェフスキは14年振りの当ホール復帰で紀尾井ホール室内管弦楽団との共演とリサイタル、そしてレヴィットは紀尾井ホールとしても異例の2年連続全4公演のロング・プロジェクトという、それぞれ単独でも年間のハイライトになるような大きな公演を3つも並べるプロジェクトであった。しかし、長引く新型コロナウィルス感染症蔓延のため、レーゼルとアンデルシェフスキこそ政府が要請する厳戒態勢の中で開催できたものの、レヴィットは入国禁止時期に当たっていたためにやむなく実施を見合わせざるを得なかった。今年22年秋、その振替公演がようやく実現する。

クラシック界にはスターと呼ぶべきアーティストがしばしば現れるが、その中でも今最も輝きを放っている一人がこのイゴール・レヴィットだ。極めて現代風なピアニストであり、演奏やレパートリー選択の知的さ、この上ないテクニックなどの他に、社会活動にも積極的にアンガージュしていくし、コロナで世界が閉ざされた時には、自分のためだけに音楽をすることはできないと、ソーシャルメディアを用い、ハウスコンサートへ誘うかのようになんと52日間連続で自宅から演奏を配信するというアクションを起こしたのは記憶に新しい。その際には16時間に及ぶ、まさに耐久レースのようなサティの《ヴェクサシオン》まで含んでいた。

瞬く間に頂点へ

レヴィットは、名高いピアノ教師ゲンリフ・ネイガウスの孫娘でオペラ歌手だった母の元に生まれ、ピアノを習い始めてすぐに才能を発揮し、早くも6歳でオーケストラと共演している。8歳で家族と共にドイツに移住してからは、ハノーファー音楽大学で英才教育を受けた。筆者が初めてその名を目にしたのは2003年、まだ彼が16歳だった時のこと。ザルツブルク音楽祭で、モーツァルテウム音楽大学が国際夏期アカデミーのマスタークラス優秀生を集めて開いたコンサートに彼の名があった。そのほぼ半年後には日本にやってきて、第9回浜松国際ピアノアカデミーコンクールで第1位を受賞、さらに翌05年の第11回ルービンシュタイン国際ピアノコンクールでも第2位に輝くなど持てる力を一気に開花させていった。

その後2010年に大学を修了すると、ここからはまさに破竹の快進撃が始まる。11年ルツェルン音楽祭にユロフスキ指揮ロンドン・フィルの「プロメテウス」プログラムで登場。翌年には初のリサイタルで再来日を果たした。以降、ウィーンのムジークフェラインとハンブルク・ライスハレ、ケル

ン・フィルハーモニー、バーデン＝バーデン祝祭劇場共同主催によるライジングスター・ツィクルス、ユリア・フィッシャーとのベートーヴェン ヴァイオリン・ソナタ全曲シリーズ、キリル・ペトレンコ指揮バイエルン州立歌劇場管弦楽団との来日、ベルリン・フィル（デビューはアルゲリッチの代役）やウィーン・フィル、コンセルトヘボウ管との共演など、その活躍はここに書き切れるものではなく、今や最もスケジュールが取れないピアニストと言われるほど。

録音の面でも、25歳となる2012年にはソニー・クラシカルと契約。30歳そこそこでCD9枚にもなるベートーヴェンのソナタ全集をリリースするなど、破格の待遇を受けている（そしてこの全集は2022年第63回グラミー賞にノミネートされた）。

© Salzburger Festspiele / Marco Borrelli

ベートーヴェン・ソナタへの集中的な取り組み

ベートーヴェンのソナタ全曲・選集演奏は2017年にウィグモアホールでも取り組まれていたが、さらに2020年の生誕250周年に向けて改めて組まれ、19年8月のルツェルン音楽祭と11月の同ピアノ音楽祭計4公演でスタート。以降20年2月ストックホルム4公演、5月サンフランシスコ（中止）、8月ザルツブルク音楽祭全8公演、その翌日からルツェルン音楽祭で2公演、1日空けてベルリン音楽祭で全8公演（合間に英国ウィグモアホールで1公演）、さらにストックホルム（一部中止）、21年7月エルプフィルハーモニー、再びルツェルン音楽祭で3公演と弾き続けてきた。

© Peter Meisel

その内19年の数公演を会場で聴くことができたが、知的で研ぎ澄まされているのと同時に、熱量は高く、またすべてのパッセージは明確にコントロールされており、音は明晰で、リズムは闊達、歌とフレーズは澱みなく、あらゆる瞬間に説得力がみなぎっていることに圧倒された。実際にその場にいると、彼の集中力の凄まじさと音楽の密度に惹き込まれ、時を忘れそうになるほどだった。これを日本で紹介したい、そう考えたのが本企画である。

いよいよ4か月後に迫ってきたレヴィットのベートーヴェン・ソナタ選集。今回は、初日が第1番、第12番、第25番、第21番《ヴァルトシュタイン》、2日目が第5番、第19番、第20番、第22番、第23番《熱情》の、共に初期から中期にかけての作品のセットからなる2公演。レヴィットが長きにわたり学び、ヨーロッパで集中して磨き込んできた結晶が日本で披露される。あらゆる音楽ファンに、2公演の内の「どちらか」ではなく、「どちらも」お聴きいただきたく、自信を持ってお薦めしたい。

制作部プロデューサー　松本學

© Felix Broede - Sony Classical

イゴール・レヴィット
ベートーヴェン・ソナタ選集

Mitsubishi Corporation Presents

Ⅰ 11/18（金） 19：00

［曲目］第1番ヘ短調 op.2-1
第12番変イ長調 op.26《葬送》
第25番ト長調 op.79《ソナチネ（郭公）》
第21番ハ長調 op.53《ヴァルトシュタイン》

協賛：三菱商事株式会社

Ⅱ 11/19（土） 14：00

［曲目］第5番ハ短調 op.10-1
第19番ト短調 op.49-1
第20番ト長調 op.49-2
第22番ヘ長調 op.54
第23番ヘ短調 op.57《熱情》

共催：ジャパンアーツ

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。